

# コロナ禍における法文学部被災記録

## プロジェクトの成果と課題

— プロジェクト教員による振り返り座談会から —

鈴木 静・青木理奈・福井秀樹  
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子  
池 貞姫・十河宏行・中川未来

### 1. はじめに

新型コロナウイルス感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対応し教育提供体制が激変して、その後、紆余曲折をへて2022年度より対面授業に戻ってきた。しかしコロナ禍前とは異なる局面が、さまざまに生じている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から継続的に収集することが重要であると考えている。

本プロジェクトは、今回の未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象とした調査として、2020年度から継続してアンケート実施、学生手記を収集・分析、座談会を開催することにより、コロナ禍初年度からの学生生活を分析し記録として保存してきた<sup>1)</sup>。また、海外大学におけるコロナ対策や学生意識との比較も

---

1) 青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存(1)学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果」愛媛大学法文学部論集社会科学編50号、2021年、37-50頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱー2020年度学生座談会報告書ー」愛媛大学法文学部論集社会科学編51号、2021年、

行ってきた<sup>2)</sup>。

本稿では、プロジェクトにかかわってきた教員がコロナ禍および本調査研究を振り返り、コロナ禍における大学教育の意義と課題等を考えることを目的に座談会を行ったとまとめを掲載する。

## 2. 対象と方法

### (1) 座談会および参加者の概要

日 時：2024年2月16日(火) 16：30－18：00

開催形態：対面（愛媛大学城北キャンパス総合研究棟2、法政共同研究室6）

参 加 者：青木理奈（社会科学講座・政策情報科学・助手）、太田響子（社会科学講座・行政学・准教授）、鈴木静（社会科学講座・社会保障法・教授）、十河宏行（人文学講座・心理学・教授）、池貞姫（人文学講座・朝鮮言

---

51-117頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ－2020年度学生手記の分析－」愛媛大学法文学部論集社会科学編51号、2021年、93-111頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ－2021年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果－」愛媛大学法文学部論集社会科学編52号、2022年、19-54頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ－2021年度学生座談会報告書－」愛媛大学法文学部論集社会科学編53号、2022年、133-150頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ－2021年度学生手記の分析－」愛媛大学法文学部論集社会科学編53号、2022年、37-57頁。鈴木静、青木理奈、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ－2022年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果－」愛媛大学法文学部論集社会科学編54号、2023年、97-134頁。福井秀樹、池貞姫、青木理奈、石坂晋哉、太田響子、小佐井良太、鈴木静、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部留学生の被災記録の収集と保存－2021年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計・クロス集計結果－」愛媛大学法文学部論集社会科学編54号、2023年、151-186頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅷ－2022年度学生座談会報告書－」愛媛大学法文学部論集社会科学編55号、2023年、133-146頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅸ－2022年度学生手記の分析－」愛媛大学法文学部論集社会科学編55号、2023年、75-93頁。青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅹ－2023年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果－」愛媛大学法文学部論集社会科学編56号、2024年、19-46頁他。

2) 鈴木静、青木理奈、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来「コロナ禍における授業提供体制の変化と学生意識－アメリカ・スタンフォード大学大学院生等座談会報告書－」愛媛大学法文学部論集社会科学編53号2022年、121-132頁。

語文化・教授)、福井秀樹(社会科学講座・公共政策論・教授)(五十音順)

## (2) 座談会の共通テーマ

本座談会では、鈴木から本調査研究の開始と経緯について報告したのち、プロジェクトメンバーにより本調査研究から浮かび上がった学生の状況や今後の課題等について、共有する。なお、座談会に出席できなかったメンバーは、座談会内容を確認した後にコメントを寄せて意見とした。

## (3) 倫理的配慮について

本調査において、対象者には、以下の内容を口頭で伝え、倫理的に配慮した。座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。公表する発言内容は、事前に教員それぞれに確認している。発言内容について削除を求めた場合には、応じている。

## 3. 教員座談会の内容

以下の発言は文脈が変わらない範囲で整えている。なお、冒頭の趣旨説明、重複する発言や感想、開会および閉会挨拶等は省略している。

### —2020年4月の緊急事態と本調査研究の開始について

**鈴木:** コロナ禍が始まる2019年に、青木さんを代表として、(法文学部社会科学講座の) 福井先生、小佐井先生、石坂先生らと科研「ボランティア参加を促すものは何か: フィールド実験による因果関係の推計」<sup>3)</sup>に取り組んでいた。2020年2月頃から状況が一変し、科研プロジェクトを中断せざるをえなくなった。何らかの形で、学生に関わる調査研究を続けられたらとの思いがあった。

一方、未知の感染症である新型コロナウイルス感染症の出現に対して、記録を残しておきたいと考えていた。私は社会保障法を専攻としており、なかでもハンセン病医療政策をテーマとしている。ハンセン病は慢性感染症だが感染症全体にも関心を持っている。欧米に根付いているアーカイブズ文化がないため、感染症のような目に見えにくい厄災は記録に残りにくいことに危機感を持っていた。例えば、100年前のスペイン風邪についての記録は、国内ではわずかしかなかった。今回の新型コロナウイルス感染症も同

---

3) 研究課題19K21723 (挑戦的研究 (萌芽))

様に記録が残りにくいことが予測され、せめて所属している愛媛大学法文学部の記録を残しておきたいと考えた。青木さん、福井先生に相談したところ、本調査研究をやりましょうと言ってくれ、部局長裁量経費を申請した。無事に採択されたが、初年度は、青木さん代表の科研メンバーの社会科学講座所属の人たちで開始した。すなわち、青木、福井、小佐井、石坂、鈴木で始まった。

部局戦略経費の採択は2020年6月だったが、私の想定だと全面的な遠隔授業という非常事態は、長くて半年ほどかと考えていた。2020年4月から遠隔授業開始で、大学も教員も混乱していて、学生も不安のなかにいた。この混乱も記録しておく必要があると考えていた。部局長戦略経費の申請当初は、学生サイドの影響や被害の記録保存と、大学や教職員サイドの記録保存という2本立てで考えていた。学生サイドの影響や被害については、2020年度から学生を対象にアンケート、手記、座談会を実施し、その結果を公表してきた。しかし、大学や教職員サイドの記録保存は十分に組み込まなかったことは反省している。

### 一コロナ禍初期の学生への影響の深刻さ

**鈴木：**実際にアンケート、手記、座談会を実施してみると、予想以上に学生へは深刻な影響があることに愕然とした。2020年前期は、遠隔授業への急激な切り替えで、学生には大きな混乱があった。遠隔授業のコンテンツも不十分で、大学からのお知らせも理解しにくく、一方的なものが多いと感じる。とりわけその年に入学した1回生にとっては、大学がどういうものか理解できないまま、顔が見えない大学教員との関係に困惑していた。授業の担当教員に質問できず、レポートをオンライン上で提出しても無事に提出できたかどうかわからない、フィードバックもなく評価がわからない。アンケート、手記、座談会では、その不満が爆発するかのように出ていた。

特徴は、真面目に遠隔授業を受けている学生ほど、孤独ななかで1年間を過ごしていたことである。個別に異なることはあるは、2020年度に遠隔授業を受けていた学生の孤独さ—とりわけ、入学したばかりの1回生は友達をつくる機会もなく、サークル活動もなく、文字通り、孤独を抱えたまま大学生活を送っていた。なかには、孤独だと感じるだけでなく、メンタル面の不調を感じている学生が一定数いることがわかり、この点は見逃げせないと考えた。翌年のアンケートには、メンタル面の不調や医療機関の受診を尋ねる項目を入れている。

### 一コロナ禍2年目以降の調査研究

**鈴木：**当初、長くとも半年で終わると思っていた遠隔授業は、局面を変えながらも2021年度に突入した。本調査研究を継続することには迷いなく、むしろ社会科学講座

だけではなく人文学講座の先生方にも入っていただき、法文学部全体を把握しようと考えた。メンバーになっていただいた方々には、快くプロジェクトに入っていただいた。あわせて、行政学を専攻し、とりわけ危機管理をテーマにされている太田響子先生に入っていた。41)

2年目には、当時の学部長から要請があって、愛媛大学教育改革促進事業（GP）に申請し採択された。福井先生が代表となり、採択された2年間は非常に潤沢な支援があり、毎年、冊子体で成果報告書を発行することができた。2023年の最終年度には、プロジェクトの成果発表サイトを独自に立ち上げた<sup>4)</sup>。

3年目が終わるとき、随分対面授業が戻ってきていたこともあり、私は本調査研究を終えてよいように考えていた。しかし、アンケート等の分析を行っていた青木さんは、2020年度入学の学生たちの卒業を見届けるまでは続けようと言われ、2023年度が終わるまで続けました。

#### —今後のコロナ禍対応検証の課題

**太田：**近年の傾向だと、災害や危機が起こった時に、行政では対応に関する検証報告書を作ることが多い。東日本大震災の時は甚大な被害だったので、その対応について、国だけでなく民間でも色々検証がされた。西日本豪雨の頃から自治体、すなわち県レベル、市町村レベルでも、検証が行われるようになった。検証報告書を作り、その当時の住民等の声や実際にどういう対応をしたかを記録、保存していく動きは、最近の傾向であり重要なことである。私たちは、一地方国立大学ではあるが、体系的にかつ長期的に、4年間の記録を生々しい部分も含めて記録しているのは、非常に有意義だと思う。現在、成果サイトを作成しているところだが、ここから次世代に向けて何を学ぶのかは、大きな課題であると思う。まずは記録を残し伝えることは本当に重要だったと思う。

**鈴木：**私たちは記録を残してはいるが、検証までは行えていない。

**福井：**検証は、大学全体でやることではないか。

**太田：**自治体で検証を行うときは、首長の意志がないとできない。法文学部のような一部局ではできないことかもしれない。今後の課題である。

---

4) 「コロナ禍における学生たちの経験・体験を未来に役立てるために。」

<https://covid19survey.ll.chime-u.ac.jp/index.php> (2024年3月28日更新)

## 一迅速にかつ継続的に情報収集を行えた理由

**福井：**このプロジェクトの1番重要な所は、まず情報を集めた所だと思う。それも継続して集めた所である。大学も各種調査を行っているが、継続してやっていない。その差は大きいと思う。

**池：**そうだと思う。このプロジェクトでは、早い段階から迅速に情報収集ができたのでは？

**鈴木：**2020年度に、青木代表のもと社会科学講座の有志で科研の共同研究をしていたのが大きいのではないかな。

**福井：**危機意識をもった代表だったから。

**青木：**代表にさせていただいて、感謝している。助手の私ができることはそう多くない。授業を担当していないので、学生の声や雰囲気を感じることもできない。普段なら、事務室でバイトしている学生の話聞くことはできるが、2020年度は対面での学生アルバイトも禁止されていた。今回は、先生方の協力をえて行うプロジェクトで、それが継続できたことも大きなことだと感じている。どのメンバーを外しても厳しかった。このメンバーだから何とか続けることができた。座談会の時、事前には参加してくれる学生がいつも集まらず、先生方から声をかけてもらっていた。座談会当日には、学生人数も予定していた通りに揃っていた。

**鈴木：**それから混乱している時期だからこそ、学生を集める水準は低くした。これまで感染症の歴史上の記録が残っていない自体が問題だと認識していた。せっかく学生を集めるなら、最も大変な学生の状況を記録しておきたいなど、要求水準は高くなりがちだが、「学生の声は全くないより、少しでもある方が断然よい」と思っていた。

**池：**様々なことが混乱していて、かつ何も手付かずの状態だったから、敷居を低くして始めたのがよかったということか。

**鈴木：**その通りだ。当初から、学生の被害実態をしるためにアンケート、手記と座談会を考えた。個人的には、このうち1つでも実現すればよいと思っていたが、青木さんが計画通りに3つとも実現した。

**青木：**実際に3つすべての結果を公表しているが、1つ1つの分析は不十分だと自覚している。記録したという程度だ。ただ今後、詳細に分析することになれば、そのベースになる記録はあるので深く検討することはできる。

### 一コロナ禍プロジェクトの教員へのインパクト

**太田：**コロナ禍が始まったとき、他の先生方もそうだったと思うが、自分の授業をやっていくのに精一杯で、正直学生がどう受け止めているかを気にしている余裕がなかった。このプロジェクトの1年目には参加していなかったが、このプロジェクトがしていることを知り、はっとさせられた。学生の声をきちんと聞いておかなければならないとは、余裕がなくて思えなかったから。その意味で、プロジェクトは凄く印象的だった。

**青木：**2020年秋にアンケートを取って、2021年3月にアンケート結果が出た。年度末に結果を公表したので、紀要を読んできた先生方が、こういうプロジェクトをしているんだねと言ってもらったことが多かった。

**太田：**その時に、大事なことだと気付かされた。教員の私は自分の事で精一杯だったと反省した。学生がどんな風に辛い思いをしているかについて、気を配る余裕がなかった。特に前学期は。

### 一コロナ禍の学生の関心の変化

**十河：**コロナと関係するかどうかかわからないが、心理学を専攻する学生が多くなった。ゼミ希望者に履修を求めている心理学実験演習は、例年多くても10人位の授業だったが、2020年にはいきなり20名以上に増えた。ゼミ生もコロナ以前の4倍以上となり、学生一人一人にかけられる時間が大きく変わった。個人的にはそのことが最も大きな変化で、大人数の演習をどう回していくのかを悩み続けた。ただ、学生と話す限り、心理学を選択した理由としてコロナを一番に挙げた人はいないので、希望者の増加がどの程度コロナと関係するかどうかは不明だが。

**福井：**私の記憶では、コロナ禍の最初の頃に授業改善のためにアンケートを取った際、心理学の授業の資料が素晴らしくて好評だった。その影響があるのではないか。

**十河：**残念ながら私ではない。しかし、その影響はあるかもしれない。



**青木**：2年目からのアンケートで精神的負担と医療機関の受診の有無を尋ねている。予想以上に、通院経験が多い。20%以上にのぼる。「迷ったけれども受診しなかった」をあわせると22.3%になる。コロナでそういう状況になったと直接的には言いにくいですが、十河先生の話を知るとコロナの影響はあるのだろう。

### 一学生と教員の距離の変化と今後の課題

**福井**：私はコロナ禍で一層難しくなったと思うのが、学生との距離感だと思う。ゼミ生とどうやって関係を作ったらいいのか。コロナ禍で遠隔授業を挟んだらもっと難しくなったという事情ですね。

**池**：わかる。これまでいくらアプローチしても全然応えてくれなかった学生もいる。そうかと思うと、学生から連絡がくることもある。対面になってから連絡が来るようになった。

**福井**：大変な学生がいるのは分かるし何とかできる範囲で支援したいと思う。どうしたらよいのか。人間関係をどうやって作ったらよいのか、難しい。

**太田**：地道に、根気強く学生とやりとりしないと、学生の困りごとは出てこない。教員側も気遣うあまり、深く聞いてはいけないのではないかと思います。

**福井**：その通りだ。一方で、学生は「どうせ話しても先生は助けてはくれないでしょう」と思っている気もする。

**池**：そう思う。学生から相談されて解決できるのか不安もある。

**鈴木**：学生座談会の時のように、話すだけでも心持ちは楽になる部分はある。教員と一緒にどうするか考えることが大事ではないか。問題によっては、弁護士に繋いだり、社会福祉士に繋いだりしている。先生方から学生の相談をいただいたら専門家につなぐのでお声掛けいただきたい。学生は、問題をかかえる以上に、孤立していて誰にも相談できないというのが辛いようだ。

**太田**：大人である私たちからしたら常識的なことでも、学生は知らないことが多く、それゆえに悩んでいる時もある。ある学生が体調面のトラブルで休みがちで、その頻度が多くなり私から医療機関での受診を勧めた。学生は「病院に行く発想がありません



んでした」と言われて驚いたことがある。

**福井**：授業料滞納など、金銭が絡むことも相談されてどうしたらよいのか考えてしまう。また、私は男性なので、女子学生の体調面のトラブルに対して相談を受けるのは難しいところがある。

**池**：それは気を遣うだろう。

**福井**：別件で、学生から授業料免除か何かの申請の相談があり、経済的に厳しい状況にあることを知ったことがある。そうした手続きの際に、学生の状況を聞く機会になっている。

**太田**：私もコロナの時に、福井先生と同様に、経済的に厳しい学生を知る機会があった。話を聞き、本当に大変だと思った。

**福井**：年度末ごとに行ってきた座談会で学生の声を聞くと、やはり人間関係を若い時に作れないのは相当大的な負の影響があるのだと感じていた。公共政策フォーラムという日本公共政策学会が毎年行っている学生政策コンペがあり、私のゼミ生も参加している。ようやくコロナによる規制がなくなり、対面で実施できるようになった。その場に参加するため学生がグループワークに取り組むと、学生同士の人間関係が深まる。そのことは私も実感できたが、学生も「グループワークを通じて初めてお互いに知り合えたと感じた」という趣旨のことを話していた。今後の課題は、教員同士や学生と教員の人間関係に加えて、学生同士の人間関係をいかに作るかではないか。

**鈴木**：最後に。コロナ禍プロジェクトは4年間も続くとは思わなかった。この座談会で、4年間を振り返り、改めてコロナ禍で学生への深刻な影響があったことに気づかされた。また、本調査研究を通じて、人文学講座の先生方と一緒に取組み議論する機会ができて良かった。コロナ禍の影響や私たちの議論を、これからの大学教育の改善に活かしていきたい。

#### 4. 他のプロジェクトメンバーの意見、振り返り

本調査研究を振り返る座談会に参加できなかったメンバーの4年間の振り返りは、以下のとおりである。なお、本稿の座談会要約を読み、コメントしているものであ

る。

### (1) 石坂晋哉（社会科学講座・地域研究・教授）

コロナ禍の状況下でわたしたちは、教育・研究など、大学での活動がなかなか思うようにできず、苦悩や葛藤を抱えていたように思います。そうした中で、このコロナ禍の状況それ自体を対象にして、新しい教育・研究プロジェクトを始めましょうというお話をいただいたとき、私は、暗闇の中にパッと一筋の光明が差したかのような思いで、久しぶりに前向きの気持ちになることができたのでした。この共同プロジェクトに参画させていただいたおかげで、コロナ禍の状況を曲がりなりにもなんとか乗り切って生き抜くことができたように感じています。

### (2) 小佐井良太（元社会科学講座、現福岡大学法学部・法社会学・教授）

本プロジェクトの4年間を振り返るべく、改めて自身の記憶を辿ってみた。ついこの間の出来事のように思える一方で、既に多くのことを忘れかけている現実改めて気づかされた。本座談会で繰り返し確認されている通り、本プロジェクトがコロナ禍で学生たちの置かれた状況にフォーカスして記録に留める作業に取り組んだことには、やはり大きな意義があったのだと実感する。

コロナ禍が始まった2020年度、私は法文学部の学生支援委員会委員長の立場にあった。遠隔授業の受講環境整備の問題に始まり、経済的支援に関する問題、メンタルヘルスに関する問題など対応すべき事柄は多様かつ膨大だった。学生たちの困難な状況を知り、必要な支援を考える上で、本プロジェクトへの関与は必然だったと思う。アンケート、手記、座談会等の異なる方法で収集されたさまざまな情報は、切実かつ大変貴重なものであった。

本座談会でも指摘の通り、コロナ禍が浮き彫りにしたさまざまな課題は、大学のあり方の本質にかかわるものだったと思う。教員と学生のかかわり方、学生自身の人間関係構築の重要性と学びの意味（「ガクチカ」問題など）、学生のパーソナライズ志向にマッチしたオンライン授業のメリット等々、「コロナ禍でとにかく学生も教員も大変だった」の一言では括れない、多様かつ複雑な状況が存在していたと言えよう。

私自身は2022年度から福岡大学に転出したことで、思いがけず愛媛大学での状況や経験を相対化する機会を得た。このことも併せ、本プロジェクトへの参画を通して得られた経験は、一人の大学教員として今後の糧となるものだった。今後も折に触れて本プロジェクトの残した記録に向き合い、学びの一助とすることを期したい。

### (3) 中川未来（人文学講座・日本史・准教授）

何よりも、学生と教員がそれぞれの立場から covid-19の社会的影響と自分自身の変

化について、継続的に「語る場」を持つことができたこと、それ自体が大きな収穫であった。

学生ならば試験や就職活動、また教員ならば業務や育児、介護など各自のライフコースのなかに設けられた大小のミッションに対応すべく慌ただしく過ぎる日常のなかで、ともすれば過去の出来事はあっという間に色あせてしまう。私たちの社会は、多くの大切な出来事を、例えそれが苦い経験であれ、余りにも簡単に忘却し続けている。戦争しかり、高度成長の光と影しかり。そのような「歴史的出来事」でなくとも、例えば Covid-19 の流行を背景に議論的となった2021年の東京オリンピックはどうであったか。

自らに加えられた外的な力を、そしてそれを受け止めた自身の姿を、「変化のプロセス」として継続的に振りかえり、その時々で言語化し共有しようとした努力は、あの災害を生きた私たちの日常とそのなかでの懸命な立ち振る舞いを経験化し、生き直し、未来の世代に投射しようという営みに他ならない。

多くの時間と労力を費やしたプロジェクトの外野で、つかず離れずの微妙な関係に終始してしまった私だが、いま改めて振りかえると、これは時間軸に沿って「変化のプロセス」を観察する歴史学（現代史）の歴史叙述に等しい行為であったと思う。2011年の震災以来、歴史学は自然災害からの復興を担う学知の一つとして立ち上がりつつある。日本史担当教員としてお株を奪われた形になるが、このプロジェクトを法文学部の学生と教員が作り上げた事実は、教育研究機関としての大学における広義の災害対応の範型と考える。

各位の尽力によって、今後はこのモデルを実際に事前防災・事前復興に生かす枠組みを、組織として考える段階に立ち至っているのではないか。十分な活用を期待したい。

## 5. おわりに

本稿では、コロナ禍における学生影響プロジェクトにかかわってきた教員が、本調査研究を振り返り、コロナ禍における大学教育の意義と課題等を考えることを目的に、座談会を行った際の要約である。

未知の感染症まん延という未曾有の状況のなか、教員の私たちも混乱し葛藤を抱えながら授業を実施し、大学の教育体制を支えてきた。本調査研究から浮き彫りになったように、学生らに対する影響は深刻であり、大学及び教職員が反省せざるをえないことも多かった。しかし同時に、未曾有の状況のなかで、継続的に学生の不安や葛藤、細やかな希望や喜びを収集し記録してきたことは、この反省を今後の授業改善や

大学教育に活かせることにつながると確認している。

最後に、4年間にわたる本調査研究にご協力いただきました法文学部の教員、ならびに参加してくださいました法文学部学生の方々に感謝したい。また、一連の研究は、令和5年度法文学部戦略経費、及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものである。